あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第97回

カタルーニャのジャポニスム

バロセロナ・カイシャ・フォーラムでの展覧会より(前)

稲賀 繁美 (いなが しげみ/国際日本文化研究センター,総合研究大学院大学)

カイシャ・フォーラムの展示場

カタルーニャには「カイシャ」という名の会社がある。日本語ではなくて、実際には「箱」に相当するカタルーニャ語 caixaに由来する。フランス語ならばcaisse、つまり信用金庫のこと。そのカイシャは慈善事業や文化事業を多様に展開しているが、その一環として、このほどカタルーニャにおける日本趣味を鳥瞰する大規模な展覧会が企画された。日本語の駄洒落が偶然通じるところにも、あるいは当地における日本趣味の下地を窺えようか。

地中海に臨む大都会バロセロナの市街南 西にはモンジュイックの丘があり,1929年 には万国博覧会の、そして1992年にはオリ ンピックの会場となった。エスパーニャ広 場からこの丘に向かう斜面の正面には、広 壮なカタルーニャ美術館があり、広場との あいだは見本市会場となっている。その西 側の一角に、かつては繊維工場だった建物 を再利用した,カイシャ財団の展示会場があ る。向かいにはミース・ファン・デル・ロー エによる万国博覧会ドイツ館があり、それ と拮抗する正面のファサードと地下のフォー ラムは磯崎新による設計。世界各国から有 名建築家がコンペに参加したが、いずれも がスペイン語での提案をなした。そのなか で、聡明にも磯崎がひとりカタルーニャ語 での設計案を提案し、これが採択されたと のこと。明るい天窓をもつ巨大な透明の箱 が地中に埋め込まれていて, 自動階段でそ こへ下ると、会場入り口の前室に誘われる。 その奥に、380名ほどを収容できる、浅い階段をなす使い勝手もよい講堂があり、その脇をふたたびエスカレイターで地上に戻って折り返すと、かつてのレンガ造りの工場がそのまま、展示会場へと再生されている。プッチ・イ・カダファルク設計による、それ自体歴史的な価値あるモデルニスモ建築である。その地上部の外壁や佇まいを壊すことなく、地下を再活用して、フォーラムに必要な空間を織り上げたもの。なかなかに巧みな空間再生の創意工夫と評すべきだろう。

かつて工場だった建物の中庭の同廊部分 が、野外レセプション会場に用いられる。 工場のレンガの壁は、とても無骨な工場跡 とは思えない意匠に富んでおり、門柱や塔 がアクセントをなしていて, 別世界に迷い 込んだような錯覚すら覚える。いつまでも 暮れない6月の群青色の空が赤茶色の壁面 と対比をなす。空が成熟して群青になると 歌ったのは、モンゴルの詩人ボヤンヒシグ だったか。地中海の夏ならではの空の下、 屋根のない空間に吊るされた電灯の光が、 レンガに陰翳を刻み込む。この簡素な演出 のお陰で、映画撮影所のような、小僧らし いほどの劇場空間が、即興にでき上がる。 展覧会の柿落としに盛装で出席した面々と, シャンペンやセルベッサを杯に談話を交わ すと, まるで舞台のなかの社交会そのまま の雰囲気となるからだ。あたりを吹き抜け る微風が肌にやさしく, 実に心地よい。

カタルーニャにおける日本趣味

展覧会の企画の実質を担ったのは、リカ ル・ブル。まだ30代の若者だが、すでに数 年前に同じバロセロナで『ピカソと浮世絵 春画』の展覧会を高評のうちに成功させた 実力者。今回の展覧会では初日の記念講演 を任されていたが、予告2日目にして会場 は予約で満席となり、3倍という倍率のな か抽選で選ばれた500名が、幸運なる講演 会出席者になったという。かく申す筆者は ブル夫妻のご手配のお陰で、飛び入りなが ら講演会にも列席する僥倖を得た。いわゆ る大航海時代 (いまではこの呼称は時代遅れとなっ たが)の南蛮屏風から始めて、19世紀後半 の欧米の日本趣味を鳥瞰し、世紀末のバロ セロナへの波及から、独自のモデルニスモ 発展への経緯を、新発見の資料を駆使して、 鮮やかに解き明かす。ブル氏はおめかしし てあまりに男前なので、最初誰?と見違え るほどだったが、 傾聴する聴衆の熱心な様 子にも感心した。

準備を進めるにつれて、地元で次々と新発見の作品や資料が発掘された。そのため展覧会には5百点近い作品を動員する勢いとなった。だが会場設営のデザイナーから、作品が多すぎるとクレイムがつき、最終的には3百点ほどに厳選したという。それでも充分な床面積を生かして、質量ともに見事な展示が実現された。230頁を超える充実した図録には、当地では初の展示品も多く含むが、日本側からみても未知の資料や作品で溢れている。この図録は、展覧会初日を待たずして、はやばやと出版関係の賞を獲得したという。

今回の企画の特質をどのように要約すべきだろうか。ひとつには、いままで正面から取りあげられることのすくなかったイベリア半島での日本美術蒐集を、歴史的沿革もろとも、まとめて紹介したこと。ふたつめには、欧米での同時代の日本趣味の流れのなかで、バロセロナの事例を比較対照させ、その特質を時代的・文化的に浮き彫りにしたこと。みっつめには、そうした日本流行が世紀末のカタルーニャの首都におい

て、どのようにモダニスモと混交し、審美的な共生を果たし、そこから20世紀初頭に何が発芽したかを、美術のみならず、演劇、映画、詩文などの領域にも跨って、具体的にその鉱脈を発掘したこと。

安土桃山を世界史のなかに据えなおす

イベリア半島での日本美術蒐集は、欧州 でも最初期に溯る。南蛮漆器と呼ばれる輸 出用の蒔絵は、もっぱらポルトガルやスペ インむけに製造された。サン・イルデフォ ンソ San Ildefonso修道院に伝わる移動用 の祭壇は17世紀初頭の作だが、金蒔絵と螺 鈿で椿をあしらった扉を開くと、三幅対の 画面となり、両側には藤の蒔絵が配され、 そのあいだには赤珊瑚でつくられた, いさ さか場違いな磔刑彫像が収まっている。む ろんこの磔刑彫像は日本製ではなく、欧州 への航海の途中で付加されたご本尊、とい うわけだろう*1。日本美術史という枠組み からはおのずと逸脱するが、むしろこうし た混淆の実態にこそ, 交易の実相が宿って いる。マドリッドのエンカルナシオン修道 院 Real Monasterio de la Encarnacionに 伝わる漆蒔絵の箱は、少し早くて16世紀末 のものとされるが、こちらには黒地の漆の うえに、葡萄の図柄が朱漆と金蒔絵と螺鈿 で配されている[図1]。葡萄がイエズスの受 難の血を暗示する意匠であることなど、お そらく注文を受けた日本の蒔絵職人の念頭 にはなかっただろう。扉には豪華な金属性 の鍵と錠前が備わるが、はたしてこれも南 蛮の注文に応じて日本でつくられたものだ ろうか。*2



図 1 漆蒔絵の箱, 16世紀末, エンカルナシオン修道院, マドリッド

カラムロCaramulo博物館には南蛮風俗を纏った若衆の歌舞伎者を描いた絵が知られる[図2]。元和6 (1620) 年の銘がある点でも貴重な作例で、「願主」として「泉屋市兵衛」の名前もみえる。解釈には諸説あるようだが、大きな十字の首飾りのほか、二本差した太刀のうちひとつの鍔は十字架となっている*3。会場にはこれと同様の十字架の鍔が展示されている。スペインのフェンシング(正確な表現ではないが)の鍔に倣って、日本では類例を見ない大型のものが発注されたとの説もあるそうだ。洋風の船に十字架が安置された意匠の鍔も展示されており、南蛮人との交易のなかで特注された鍔の研究、という可能性がみえてくる。

さらに、まだ充分には研究の行き届いていないのが、踏み絵だろう。トーマス・ダコスタ・カウフマンも『美術の地理学にむけて』で指摘していることだが、西洋起源の金属彫像を踏み絵に転用したもの、日本でそれを模倣して作成した金属製の彫像を木版に埋め込んだもの、あるいは全体が木製の浅浮彫り、など何種類かに類別できる。今回展示された作例は、実際に使用されて表面がつるつるに摩滅した金属の踏み絵。サント・トマス修道院Real Monasterio de Sant Thomasに伝来したもので、アヴィラ



図2 南蛮風俗の若者(1620年,カラムロ博物館)



図3 踏み絵(サント・トマス修道院伝来,アヴィラ美術館蔵)

の東洋美術館が所蔵する。実際に日本で使用された踏み絵など、いったいどのような伝承を伴って、いかなる経路で、遥かイベリア半島にまでもたらされたのだろうか。 美術品の辿った数奇な来歴、その経緯復元も興味深い。

日本趣味の洗礼

こうした南蛮美術の輸入先であっただけに、19世紀後半の欧州における日本趣味が、イベリア半島にそれなりの特色を授けたとしても不思議ではあるまい。だがこの局面はいままでの研究では蔑ろにされてきた。スペインはあたかも後進国扱いだったからである。

とはいえここに、マリア・フォルトゥニ Mari à Fortuny (1838-1874) ひとりを置くだけで、構図は一変する。フォルトゥニと川村清雄らヴェネチィア滞在の日本画家たちとのあいだに交友のあったことは、高階秀爾、丹尾安典ほかの先行研究が教えるところだが、こうした人脈は、従来なぜかジャポニスム研究では視野の外に取り残されたに等しかった。幅15メートルにおよぶ大作《テトゥアンの戦い》というスペイ

ンのアラブに対する戦勝画を出世作とする この画家は、地中海出身の背景を生かし、 東洋趣味から日本趣味へと関心を広げていっ た。1867年の徳川昭武を名代とする幕府使 節のパリ来訪期に関しては、ジェムズ・ティ ソによる《昭武の肖像》が出品されている。 フォルトゥニと幕府使節団とのあいだにこ のとき接触があった確証はないが、岩倉使 節団のローマ訪問 (1873) は、フォルトゥニ のローマ滞在中の出来事である。『北斎漫 画』のみならず2世国貞による忠臣蔵の浮 世絵版画の模写や、あるいは写真に基づく かと推測されるちょん髷姿の武士の素描な どが展示されていた[図4]。扇は当時日本か ら大量に輸出されたが、スペインではもと もと装身具として独自の発展を遂げていた。 こうした文化的な背景を踏まえたものか, 貝殻細工の骨にフォルトゥニが装飾を施し た扇面では、前景の鶴と蓮池が、後景のス ペイン風俗と見事に溶け合っている*4。 1878年のパリ万国博覧会のおり、マルティ ン・リコMartin Ricoが帰国する川村に手 向けた書簡が知られるが、1883年にリコの 描いたパリ風景のパノラマには、手前の手



図4 フォルトゥニ 武士の素描

すりの草木ごしに背景が臨まれ、川村清雄 お得意の構図も髣髴とする。これら日本の 画家と直接に交渉のあった藝術家たちにお よぼされた感化の質が問題となる。

□ この時期までには、カタルーニャ出身の 画家たちの作品にも、壷や、刺繍をほどした 座布団(ライムンド・マドラゾ Raimundo Madrazo の《午睡》《読書》)など、日本からの輸出品 が舞台装置や小道具として頻出するように なる。その多くは皮相な異国趣味の証拠と みなされがちだが、ホセ・ヴィレガス Jos Villegasの《東洋の遊戲》(1880頃)では、朱 の地に豪華な刺繍をほどこした和服を着た 少女が白熊の毛布のうえに横たわり、闘鶏 を嗾けている。ジャン=レオン・ジェロー ムの出世作《闘鶏》は、ヴェスビオス火山 を背景としていたが、それが日本趣味の装 いを纏った趣向。青銅の香炉や漆塗りの鳥 かごも、日本からの舶来品であろうか。エ ウドゥアルド・サマコイス (Eduardo Zamacois) は北米の友人、ウィリアム・スチュアート に宛てた手紙の挿絵に《日本のファンタジ ア》「図5]を描いている (1870) *5。こちら は大名行列とアラブのファンタジアとが混 交し, そこに芸者らしい女性の服装も立ち 混じるという, 典型的な異国趣味。岡の上 の見晴らしよい亭の屋根の頂には、鯱なら ぬ洋船の意匠の、しゃれた飾り物が乗ってい る。フランセスク・マスリエラ Francesc Masrieraの《舞踏会のあと》「図61は当時の 風俗画に常套の失恋の画面だが、侍女や女 友達に慰められる失意の女主人公は、金糸 の刺繍をほどこした豪奢な和服を纏ってい

カタルーニャにおける日本趣味の流行にあって、このマスリエラ家の蒐集がひとつの中核をなす。江戸期の木彫塗金の釈迦如来は、今回初公開とのことだが、台座を含め231cmの高さを誇り、当地に将来された作例としては最大の仏像だろうか。そのほか個人蔵の作品として、桜に孔雀を描いた豪華な刺繍、青銅器の鶴、黒檀の台座のうえに白檀による衣を羽織ったらしい、あまり類例を見ない地蔵菩薩像なども展示され



図5 エドゥアルド・サマコイス 日本のファンタジア 1870



図 6 フランセスク・マスリエラ 射 踏会のあと 1886



図7 サンティアゴ・ルシニョル マリア・ルシニョル嬢のいるフェラット邸の内部(部分) 1894

ていた。おそらくは輸出用の品々だが、そ れらの来歴の追跡も望まれる*6。バルセ ロナで1885年、おこわれた日本の骨董売り 立ての挿絵入り目録、1887年に目抜き通り、 カタルーニャ街での「ミカド」のチラシ (タコが鉢巻きをして、ホタテ貝でできた三味線を弾い ている。「ミカド」は1885年に開店した東洋骨董店)な どからも、欧州での日本趣味の流行がイベ リア半島の大都会に浸透した様子が如実に 伝わってくる*7。なかでも代表的な油彩画 家だったサンテイアゴ・ル シニョル Santiago Ru siñolの《マリア・ル シニョル嬢のいる フェラット邸の内景》(1894) [図7] は貴重な 作例だろう。というのも背景の少女のかた わらに置かれた屏風の原作が、美術館と なった邸宅にいまも伝えられているからだ。 大名行列を描いた二双横長の、いささか特 異な形状の屏風だが、金箔地のうえに、綿 細工の詰め物で浅浮き彫りを模した人型が 精妙に接着された工藝品であり、損傷しや すいこの種の細工物としては、保存状態も 良好と見受けた*8。

「註〕

- *1 日本製の祭壇がスペインに輸入されてのち、シシリアに磔刑像を依頼し、それを祭壇に奉納したものという。
- *2 金属の錠前にルイスの名が刻まれているが、 キリスト教に帰依した京都の職人と推定される。
- *3 カラムロ博物館では、カトリックに改宗した 日本人と解釈されている。十字架を含めた異装が流行 となった世相がうかがえる。
- *4 鶴は『北斎漫画』第1巻,植え込みの朝顔と 菊は同じく第2巻よりの引用。
- *5 サマイコスはこの書簡でウィリアムに日本の 品を所望している。ウィリアムはフォルトゥニにも兜 を贈っており、ローマのアトリエにそれが飾ってある 様子はボストン美術館所蔵の作品に描写されている。
- *6 釈迦如来の背中にはフランスの商店の商標が 貼ってあり、1870-80年代と推定できるとのこと。
- *7 フェラン街には日本美術店が集中し、1887年 には「日本ファンタジー」というポスターが刷られて いる。また有名な百貨店「エル・シグロ」は商品目録 を発刊しており、ここにも日本部門の存在が確認でき る。
- *8 再発見された段階では、損傷が酷く、今回の 展示のために修復したものという。本展覧会のために、 35点にのばる作品が修復されたという。

*今回の滞在と取材に際しては、リカルド・ブル・高部紗知代夫妻からは一方ならぬお世話を戴いた。主要な参考文献は、Japonsimo, la fascinatións por el arte japonés, Obra Social, La Caixa, Comisario: Ricard Bru i Tur uell, 2013. ブル夫妻には拙文にもお目通し戴き、詳細なコメントを頂戴した。記して謝意を表す。なお、カタルーニャ出身者の人名表記は現地音を優先した。また言うまでもないが、残る誤謬は、あくまで筆者の責任に帰する。